

不登校経験者の高校段階における学校復帰に関する研究

— 不登校経験者等の聞き取りを通じて —

山田佳典¹

神奈川県では、不登校を喫緊の課題として、問題の根源的な解決を目指し、その対応を強化している。本研究では、小・中学校で不登校を経験し定時制高等学校で登校を継続している生徒と、それを支える教員に聞き取りを行った。生徒の不登校時の心理状況や登校に至ったプロセスと、その後の登校を継続させる支援を明らかにした。また、聞き取った内容の分析をもとに、不登校に関する取組みの充実を図る手立てを探った。

はじめに

文部科学省では「不登校とは、何らかの心理的、情緒的、身体的、あるいは社会的要因・背景により、児童生徒が登校しないまたはしたくともできない状況にあること（ただし、病気や経済的理由によるものを除く）」（文部科学省 2011）と定義している。平成18年度から22年度までの過去5年の全国の不登校児童・生徒数は、小学校約2万人、中学校約10万人、高等学校約5万人とほぼ横ばい状態であり、依然として多くの児童・生徒が学校に通えていない状況がうかがえる（文部科学省 2011）。

本研究では、小・中学校で不登校を経験し現在は定時制高等学校に在籍する生徒と彼らを支える教員・管理職に聞き取りを行うことで、不登校時の心理状況や登校を継続させる支援を明らかにすることを旨とした。

研究の内容

1 研究テーマの設定・研究の目的

(1) 神奈川県の取組みと不登校者数

不登校児童・生徒の減少に向け、県教育委員会は、「神奈川県不登校対策検討委員会」を平成19年10月に設置し、不登校についての分析・検討を行い、対策にあたってきた。しかし、不登校に関する取組みについては、不登校の原因が多様であること、不登校の渦中にある当事者と直接話をするのが難しいケースも少なくなく、本人と話ができたとしても、本人も学校に行けない原因が分からないという場合も多いことから、態様に応じた適切な支援を行うことが難しい。

本県の不登校児童・生徒数は平成22年度では、小・中学校は約1万人、高等学校では約3千人となっており、不登校は依然として大きな教育課題となっている（神奈川県教育委員会 2011）。

1 神奈川県立海老名高等学校

研究分野（一人ひとりのニーズに応じた教育研究支援教育）

(2) テーマの決定、研究の目的

多くの先行研究では、不登校児童・生徒の不登校の原因や心情を理解することの大切さが説かれているが、不登校状態にある生徒と直接コミュニケーションをとることは難しく、本人がどのような心情・状態にあるのかを把握することが非常に困難であるように思う。

神奈川県立総合教育センター（2010）によると県立定時制高校では約40%の生徒が小・中学校時に不登校を経験しており、生徒の支援体制の充実が図られているのではないかと考えた。本研究は、小・中学校で不登校を経験し、定時制高等学校に継続して登校している生徒への聞き取りを通して、学校復帰と登校継続につながる教員の支援について考察することをねらいとし、研究テーマを設定した。

なお、本研究における「学校復帰」とは「学校に定期的・継続的に通えるようになった状態」と定義した。

2 研究の手立て

(1) 聞き取りの対象（調査協力者、研究対象）

神奈川県立総合教育センターから、定時制高等学校に聞き取り調査の協力を依頼し、協力の得られた3校5名の生徒と彼らを支える教員・管理職に半構造化面接（調査対象者に自由に語ってもらう部分と、質問の枠組みに沿って、厳密に回答してもらう部分に分けるやり方）による聞き取りを行った。

研究対象の選出については、学年や性別等は指定せず、研究の趣旨のみを伝え、定時制高等学校の教員に依頼した。対象の概要は第1表の通りである。不登校当時の心情等、自身の経験を冷静に語る事が可能な生徒が多く、筆者の想像以上の回答が得られた。教員への聞き取りについては、聞き取りに応じてくれた生徒の担任（元担任）および管理職に話を聞いた。

(2) 調査の時期・調査場所・データ収集方法

安定した状態で話ができることを第一に、学校の一室を借り、筆者と神奈川県立総合教育センター指導主事もしくは教育心理相談員2人が生徒1人に対し（場合によって当該生徒と関係の深い教員が付き添い）聞き取りを行った。実施時期は2011年10～11月である。

データ収集は、聞き取り生徒の心理的負担が軽減できることに加え、彼らの感情や自身の考えが話せることを重視して、半構造化面接を用い、30分程度の聞き取りを行った。音声は承諾を得た上で、ボイスレコーダーに録音した。

第1表 聞き取り対象の概要

性別と学年	不登校期間
高1 女子	中3の3学期
高2 女子	小6～高1
高2 女子	小6～中学卒業
高2 女子	中1秋～中学卒業
高2 男子	小2・3～中学卒業
(備考) 生徒の中には高校1年時に休学していた者、学年の切り替わりを機に学校復帰したが再び不登校となった者、教育支援センターに通っていた者もいた。	

3 聞き取りの内容・結果と分析

生徒への聞き取り結果については第2表・第3表の通りである。調査協力者の各回答を高等学校入学前・入学後に分け、キーワード、キーセンテンスを拾い出してまとめ、分析した。教員・管理職への聞き取り結果は第4表の通りである。

第2表 生徒への聞き取り結果（不登校時の様子）

	不登校時の様子
不登校のきっかけ	友人が陰口を言っていたのを知り、人間不信になった(A)。小学校6年生の時に友だちとトラブルになり、そこから(B)。嫌な授業に行きたくないと思っていた。それが募って。人間関係を作るのが下手で、話せる子はいたが、本当の友だちと思える人がいなかった(C)。友だちと喧嘩。「一人ひとりと話がしたい」と伝えるが、その場には相手が全員おり、さらにいろいろ言われた(D)。クラスが嫌だったわけでもないが、何か行けなくなってしまったとしか言いようがない(E)。
不登校時の様子	行きたい！行きたいけど行けない。何やってるんだろう、自分は(A)。最初の頃は気持ち悪くなったりした。だんだん状態はよくなったが、他の生徒の目が気になり行けなかった。登校するのは自分の中で解決するまでは無理だった。当時は自分が全部悪いと思っていたので、先生が友人関係を調整してくれたとしても、登校は無理だったと思う。中3のころ相談室に登校したが、仲の良い子がいるわけではないので、途中で行かなくなった(B)。学校に行かなきゃと常に思っていた。家族以外の人は受け入れていなかったの、何を言われても行く気にはなれなかったと思う。中学の時は相談室登校を数回行ったが、かなりの負担だった(C)。個人個人が嫌いというより、その場にいることが嫌、全体的な雰囲気

	だった(D)。家に一人の時は「これでいいのか。まずいんじゃないか」と考えていた。家に一人だとすごく寂しい。学校に行くと友だちがほしいと思ったが、学校を見るとどうしても動けなくなり、苦しかった(E)。
教員	学校に行くのは嫌だったが、先生に誘われるのは嫌じゃなかった。先生に誘われ登校できることもあった(A)。しつこい電話や家庭訪問が嫌だった。プレッシャーをかけられてしまうと考え込んでしまった半面、行事に参加しないだろうと、誘われもしなかったのが嫌だった。友人が手紙を届けに来てくれるよう配慮してくれたが、徐々に頻度が少なくなっていった(B)。先生はプリントとか、行事連絡とか、本当にたまに来るだけで、そんなには来なかった(C)。中2の先生が熱心に関わってくれた(D)。会うたびに「学校に早くおいでよ」と言われ、気持ちを分かってもらえていないと思った(E)。
学校復帰	中学への復帰は難しいが、高校は絶対通うと決めた(A)。中3の2学期から受験に向けた気持ちが高まった。こんなことをいつまでしていてもしょうがない。仕事とかしたいから(B)。中3の初めに、高校に入らないと人生がヤバイと思った(C)。卒業ギリギリまで高校に行く気はないと担任に話していたが、自分の夢を追いかけるには高校に行かなければならないと分かった。友人が現在の学校に行こうと誘ってくれた(D)。中3の夏休みあたりに担任の先生から高校をどうするのか尋ねられた。中学校の卒業が近づいてきて、さんざん親に迷惑を掛けて学校も行かず就職もできなかったらまずいと思った。学校に行こうとずっと思っていたが、なかなか動けず、中学も卒業でこのままでいてしょうがない、気持ち悪いとか嫌だとか言っていられないと思った(E)。

(1) 不登校時の様子のまとめと分析

ア 聞き取り生徒の特徴

友人とのトラブル、人間関係をつくることは得意ではない、人間関係の困難に対しての適切な対処方法が分からないなど、どの生徒も人間不信・人間関係のつまずきを理由に不登校に至ったと考えられる。

イ 不登校時の心理状況

(ア) 学校に行きたいけど行けない

「学校に行こう」という気持ちをもっているが行けない生徒が多かった。不登校が継続した原因としては「他者の目が気になる」「自分が全部悪いと思っていた」「家族以外を受け容れられなかった」などと認識していた。また、教員や友だちの働きかけを肯定的に受け入れることが難しく、「行きたい」気持ちを「行く」エネルギーに変えられず、動きたくても動けなかったと想像される。「学校に行こう」という気持ちは、明確な思いというより義務感や漠然とした思いだったと考えられる。

(イ) 自身の考えに固執し助言が届きにくい場合がある

伊藤(2009)の通り、人の目を過度に意識し、自分で

作った人の目に振り回され、教員等の助言が届きにくい様子が見えられた。

(ウ) 子どもの心理状況は変化する

不登校が継続する要因は、例えば「身体の不調で登校出来ない」から「心の不調で登校出来ない」に変化することがある。また、気持ちもその時々で変化する。教員に「おいで」と言われると嫌だが、行事の連絡が来ないと寂しいと思ったりするのはそのためである。教員が「生徒の話を聞きたい」「つながりたい」と思っても、生徒の微妙な気持ちに正確に寄り添うことは難しく、そのことが、生徒の「分かってもらえない」感や、学校への否定的な感情につながっていく。教員は難しいながらも、生徒とのつながりを維持することに重きを置き、見守る姿勢も必要なのではないか。

(I) 高校受験をきっかけに変化する

生徒全員が中学3年時に高校に通おうという気持ちが高まってきていた。進路決定が目前に迫り、「仕事・就職・夢」など将来を意識し、学校に行く覚悟のようなものが決まっていたと思われる。

ウ 学校・教員の対応

聞き取りから推測すると、家庭訪問や電話連絡、機会を捉えての登校の促し、友だちを介して手紙を届ける等の働きかけがあった。しかし、本人の気持ちや状況が変化したり、自分の考えに固執したりしている生徒には教員の助言が届きにくく登校には至らなかった。

教員の働きかけが功を奏して、登校できた生徒も1名いたが、クラスが替わり友だちや担当教員が替わったことで、再び不登校状態になった。このことは、登校後の長期的な配慮の必要性を示唆する。

共通するのは、他の生徒と同じく進路を考えさせる関わりをもったことである。このことが高校での再登校につながったと思われる。

第3表 生徒への聞き取り結果（高校入学後の様子）

	高校入学後の様子と心理状況
学校復帰時に	周りの目は気にしないよう、表面上は無理して明るくして耐えてとりあえず行っていた(A)。登校し始めた頃は腹痛・頭痛を起こす時もあり、家を出る際もぐずぐずしていた。ただ我慢して行っていた。他人が自分の全てを見ているのではないかと思っていた。いつまでも親に頼っていてもしょうがない。こんなこといつまでしていてもしょうがない。仕事とかしたいので(B)。友だちができるかなど、不安ばかりだった。入学してすぐは中学生の時に逆戻りし、教室に入れなかった。一回椅子に座ったら立てないほど緊張していた。担任の先生に気持ちを話すと理解してもらえ、数日は教室と違う部屋に行ったりしていた。学校の雰囲気慣れるのに必死だった。人の目が気になり、勉強どころではなかった(C)。入学当初の緊張・不安はかなり高く周りが怖かった(D)。クラスの人と話せるのかなど、すごく不安だった。登校については、誰かに言われると何もできなかった

	ので、やっぱり自分で考えないとダメなんだと思う(E)。
学校生活に	みんないい人。意地悪するという感じがなく優しい。話し掛けるとみんなやさしく接してくれる。人と打ち解けるのが苦手で、話すことはできるが今はまだ仲の良い友だちはいない。一人のほうが楽しい。「みんなで一緒にやれ」、「こうやってやれ」と言われない。先生が班決めの際を緩やかにしてくれた(A)。部活をしたり、友だちと一緒にいるのが楽しい。今は一人が「あの子嫌だ」と言い始めてもみんなそうなることが少ないように感じる。休学中に「待っているから来たい時に来ればいいよ」と言われた。先生たちの親しみやく少し緩い感じがいい。「～しなさい」というより、「やってみない?」という感じで言ってくれる(B)。最初は「明日も休まないで行けるかな」など不安だったが、先生が毎日話を聴いてくれ自分自身でも休まないようにしようと思って登校し、学校に行くにつれ行くのが普通になり、周りの声が気になることもほとんどなくなった。今は欠席0。行事も高2になってから全部行っている。今は部活をしたり、普通の学校生活。大学に進学したい。勉強以外困っているところはない。気を遣わない、心から友だちだと思える人ができた(C)。現在通っている学校は一人ひとりがいろいろ抱えており、他の生徒のことも考え、自分がされたくないことはしない。自分の感覚を分かってくれる人だといろいろ話せるので、似た人の存在は大きい。先生が熱心に相談に乗ってくれる。将来の目標がある(D)。思ったよりも緩かったのでやっていけそうだと思った。毎日学校に来るだけで精一杯。無理やり来ている感じ。話せる人はできたが、そこまで仲良くなっていないと思う。支援センターはみんな似たような感じだったので仲良く過ごせたが、普通の学校ではちょっと違う(E)。
学習に	どれも同じように苦手。分かりやすく教えてくれる。できると楽しい(A)。不登校時は勉強していなかった。授業は分かりやすい(B)。とにかく勉強を教えてもらいたい。大学に入るためにも。毎日勉強で、ストレスが溜まる。中学の時勉強しなかったから、基礎も分からないままやっていた。授業が本当に分からなかった。学習に対する焦りや不安は以前はなかったが、今はある(C)。授業には全然ついていけなかった。先生は熱心に教えてくれ、質問もしやすい雰囲気がある(D)。授業内容は、他の子にとっては分かりやすいのだと思うが、中学校を出ているのが前提なので、自分にはよく分からない。質問をしやすい雰囲気はあるが、基礎ができてないから質問をしても分からないと思う(E)。
不登校を振り返って	距離をとり、普通に接して学校に行けばよかった。仲良くしてくれた子を信じておけばよかった。中学の先生の「考え過ぎだよ」という言葉を、今になって納得できるようになった(A)。考え過ぎていた。不登校前後での変化・成長は特に感じない(B)。中学の時に気持ちを吐き出す場があれば多分、学校に行けていたと思う。自分はこういう性格なんだと高2になって分かってきた。登校できるようになった理由はよく分からない。変化・成長の実感はない(C)。先生と話をすることで、自分が知らなかったことを知り、見方

	や考え方に幅が出てきた。学校に行けなくなった子の気持ちが分かるようになった(D)。得たものは何もない。全部無駄にしたと思う。気持ちを理解してくれる人がいたら、楽だったと思う。一人で悩まず、相談できるのが一番いい(E)。
教員に望むこと	自分からは先生に話しに行けない子もいるので、様子の変化に気づいたら先生から声を掛けてほしい(C)。話を自分のことのように聴いてくれ、熱心に相談に乗ってほしい(D)。学校や先生には特に期待しないでずっと来た。先生が気持ちを分かってくれたら嬉しいが、自分一人だけに集中することは無理だなと思っていた。普通に接してくれるのがいい(E)。

	で支援を行っている。学校全体で押し付けない・生徒と関わりをもつ指導体制を共有している。生徒指導というよりは生徒支援に近い形の対応を全体で共有している。
--	---

第4表 教員・管理職への聞き取り結果

	学校・教員の支援
学校復帰時	クラス分けの際、不登校経験者を多く集めたクラスを編成している。無理して登校させることはせず、別室登校を勧めたり、出たくない授業があるならこの部屋で休んでもよいという形で受け容れた。「学校に来なければいけない」ということは本人が一番強く思っているので、「何が何でも来い」という指導はしなかった。登校が継続するように対応しなければいけない。学校説明会の機会を大事にしている。この学校に行きたいという思いが高まると、それが原動力になり、生徒は変化し始める。登校が安定するまで家庭と連絡を取り続けた。
現在の学校生活	授業に遅れてきても、「よく来たな」と対応する先生が多い。学校全体が「～しなさい」という形で押し付けない方針で生徒に対応している。言葉以上に表情や態度など体全体で生徒を受容する姿勢をとるようにしている。行事等を利用して節目節目に登校の誘いをかけた。本人の話を受け入れつつ、違う見方もあると頑なさを解きほぐす話をしていた。教師の声は届いているが、生徒の中にはすぐには行動に移せない者もいる。長い目で見ることも必要。本人と周囲の意思を確認しながら、弾力的に物事を進めている。一人ひとりの様子や、自身とのやりとりを記録に残すなど、きめ細やかな指導を行ったり、生徒の情報を他の先生も分かるように、情報発信をしたりしている。
学習について	授業で楽しさを感じられるようにしている。実学講座を設置し、他者や社会とそれとなく関わる工夫をしている。コミュニケーションスキルを磨いて社会人としてのスキルアップになるとよい。生徒の学力差が大きい。授業を大事にする姿勢を共有している。教科書も中程度以上の内容を含んだものにし、それを噛み砕いていかに生徒に伝えるか工夫している。学期ごとに学びなおしを行い、学習内容の理解促進に努めている。また大学進学補習を行っている。生徒同士が教える授業形態をとったり、中学校の学びなおしの科目を用意している。
共通認識	不登校対応というより、自立支援といった観点で、不登校だった生徒にもそうでない生徒にも、平等に関わっている。自分が関わっても大丈夫、楽しいという感覚から自己肯定感の向上を目指し、それが社会参画につながればいいという思い

(2) 高校入学後の分析と考察

ア 高校入学時の生徒の心理状況

(7) 「もう一度通いたい」という思いをもっている

生徒はみな「学校に通いたい」という気持ちをもっていることがうかがえた。

(4) 集団が苦手な強い不安と緊張を持っている

「学校に通う」と決意して高校に入学したものの、周囲の目が気になるなど、緊張が強くなっている様子が見られる。

(7) 学習への不安を持っている

学習に対する不安は一様に強く、自信のなさも読み取れた。

イ 登校を継続させることについて

生徒が登校を継続させていくには、(ア)不安がありつつ通える段階、(イ)不安が軽減し毎日通える段階、(ウ)周囲の人と高校生活を楽しめる段階という三つの段階があると考えられる。

(7) 不安がありつつ通える段階

「周りは気にしないよう表面上は無理して明るくして耐えてとりあえず行っていた」「登校し始めた頃は腹痛・頭痛がする時もあり、最初のうちはただ我慢して行っていた」「教室に入っても一回椅子に座ったら立ってないくらい緊張していた」などの状態がこれに当たる。

(4) 不安が軽減し毎日通える段階

『明日も休まないで行けるかな』など不安だったが、学校に行くにつれて学校に行くのが普通になってきた。今は欠席0。周りの声が気になることも、ほとんどなくなった」などの状態がこれに当たる。

(7) 周囲の人と高校生活を楽しめる段階

「部活をしたり友だちと一緒にいるのが楽しい」「気を遣わず心から友だちだと思える友人ができた」「今は部活をしたり普通の学校生活。勉強して大学に進学したい」「将来の目標がある」などの状態がこれに当たる。

4 考察

(1) 高校入学前の支援について

小澤(2003)らが述べているように学期や学年・学校の変り目は学校復帰に向けて、気持ちが大きく動き始める。中でも、進学はより強い動機となり、高校に入って「もう一度学校に通いたい」という思いを強く後押ししたと考えられる。

聞き取りを行った高校は、生徒の学校復帰の動機を高めることを意識した働きかけをしている。生徒の中には、複数の学校の説明会に参加して現在の学校に魅力を感じ「この学校に行きたい」と強く思うようになった者、自ら申し込んで個別に複数回の学校見学をし

た者もいる。また、文化祭などでその高校を知る機会をもったことにより、学校に通いたいという気持ちがさらに高まった者もいる。聞き取りを行った生徒の進路情報を求める意識は一律に高く、その学校文化を肌で感じるような中学校での進路選択に向けた丁寧な指導が、学校復帰に向けた支援として有効であると考えられる。学校復帰の第一歩は、入学前からの関わりから始まっているといえる。

(2) 高校入学直後の支援について

生活環境が変化する時は誰でも不安や緊張を抱く。特に、高校入学をきっかけに「学校に通いたい」という思いで再び学校に通い始めた者は、より強い不安や緊張を経験する。そして、その不安や緊張は長く続いたり、何度もよみがえったりする。生徒の中には、入学直後に教室にいることが苦しくなり、そのことを担任に話し、座席の工夫や別室登校による支援を受けた結果、緊張や不安が軽減した者がいる。約3ヶ月教室に入れず廊下等で過ごしていたが、教科担当の入室の言葉掛けをきっかけに教室に入れるようになった者もいる。入学後登校を継続できず休学し、2度の高1を経験した者もいる。この事は「高校に入ってもう一度学校に通いたい」という本人の思いだけでは、学校復帰につながりにくいことを示している。

生徒の目標を社会的自立におき、本人のできることから始めることを支援する弾力的な取組みや、教員が情報共有をし、担任以外でも生徒に働きかけられるきめ細やかな支援体制をつくること、長い目で見て継続して支援し続けることが、学校復帰に大きな力となる。緩やかにつながり続け、生徒の気持ちが整うのを待つことも高校入学後、「高校に行きたい」という気持ちだけでは登校できなかった生徒に必要な支援である。

学習の不安に対する支援も必要である。聞き取りの中では、中学時の内容を復習する講座の開設、学期ごとの学習内容の復習、進学意欲の高い生徒を対象の補習講座の開設など、学校全体で生徒の不安を和らげる工夫が見られた。生徒は「先生が熱心に教えてくれるので、授業が終わった後に分かったという実感がある」などと語っており、教育課程を工夫し、教員が教授方法や授業の雰囲気作りに配慮し、分かったと実感できる授業を行うことが有効な支援であると考えられる。

(3) 登校を継続させる支援について

学校復帰が第一の目標ではあるが、登校が安定すると、教員は生徒により楽しく充実した学校生活を送って欲しいと願うものである。小林(2002)が「不登校体験者で学校に復帰した人が一番得るものは『自分が信頼できる人と出会えた』という体験だった」と述べるように聞き取りを行った生徒の中には、高校で信頼できる友人ができたり、仲間と部活動や行事を楽しんでいる者もいる。

人と関わることに抵抗があり、踏み込めない生徒に

とって、授業を通してコミュニケーション能力を磨いたり、生徒同士が教え合う活動を取り入れていくことは信頼できる人に出会うチャンスを広げることにつながる。教員一人がつながることから始め、ゆっくりと友だちにつながり支援も考えられるだろう。一人が楽しい、グループに所属することがきつと感じる生徒もおり、この段階では、一人でいることが許される環境を整えることが最も必要な支援であると考えられる。

小林(2002)は就職し職場に入った人が一番得たものは「自分に対する自信」だったと述べているが、将来についての目標を持っている生徒が、それを実現させることはさらなる生きる自信、生きる力につながる。実学講座やボランティアなど社会につながる活動を行うこともそうした力を養う一つの方法である。目標に向かって学び始めると、ストレスも生じるが、それを上手に利用して、目標に向かって進むことを支援することも生きる力を身につけるために必要である。

登校をより安定させるための鍵は「学校に行こう」「学校に行きたい」というモチベーションの向上にある。その背景には、学習の楽しさを実感したり、進路目標を持ったり、友人ができたり、教員と話をすることによって違う見方や考え方ができるようになったり、部活動を楽しんだりすること等があげられる。学校が楽しい場所であると感じ、モチベーションを向上させることが登校を継続させる大きな要因となる。そのため必要な条件は、本人の状態を把握すること、状態に応じてその時々に必要な対応を段階的に行っていくことである。聞き取りを行った学校は、様々な方法で緩やかに生徒とつながる関わりを持ち続けていた。そこから得た情報をもとに、座席の位置を考慮したり、別室登校を呼びかけたり、一人でも何とか自分の所属する教室にいられる環境をつくったりしていた。また、登校が安定してきた際は、徐々に人間関係を結ぶよう授業内容や授業形態を工夫したり、その時々個人の様子に応じた段階的な支援を行っていた。

また、最も大切なことは生徒を受容することであろう。生徒の中にも明確な進路目標を持ったり、親しい友人ができたりしてモチベーションが高まっている者と、集団の中で生活はできているものの、登校するだけで精一杯な者と学校復帰後の状態はまちまちである。

学校復帰後に必要な支援は、学校をあげた支援の上に、時にはつながりながら待つ支援、一人でいることを認める支援も含め、個を見つめ一般的な価値観や他の生徒との比較で生徒の価値を決めつけることなく、本人の希望や成長のスピードを尊重した支援である。

(4) 学校を挙げての支援

不登校対策の取組みを充実させるには、カリキュラムの設定や学習指導方針、長期的なスパンで対応する支援体制の確認(共有)、学校内における安全・安心な環境づくりなど、担任だけでなく、学年団、学校全体

で対応する姿勢が必要である。聞き取り生徒が望んでいた「生徒の話を熱心に聴く」ということは、担任教諭以外も行える支援である。

(5) 不登校経験者を支えるもの

学校復帰を果たしたことによる自身の変化や成長を聞いてみると、「変化や成長を感じない」と答えた者もいるが、教員は生徒の変化や成長を「客観的に物事を語れるようになった」「自分の考えをはっきり言うようになってきた」と捉えている。改めて聞くと、本人は変化や成長を感じないと答えるものの、現実としては自分を振り返り成長している様子を感じている。それはまさしく「自己理解」である。まだ滑らかに語る段階には至っていないが、肯定できなかった過去を振り返り、現在の自分とのつながりを感じ、変化し続けている自分を意識している。それを支えたものは何より教員が彼らに寄り添い、つながり続けたことであろう。彼らは、感情や感覚の波にもまれる中で教員の温かい見守りによって、また、つながりによって、語り合いによって、自己理解を深めていった。その意味で、教員は生徒の自己理解の促進者であるといえる。

教員が促進者になり得たのは、学校全体による支えがあったからである。学校全体で「押し付けない、生徒と関わりをもつ」「生徒の楽しいという感覚から自己肯定感の向上を目指す」等の共通認識ができていからこそこれらの教員の取組みが有効に働くのである。

生徒の言語による語り、無言の語りに耳を傾ける教員の緩やかだが止むことのない地道な関わりが生徒の安心感へとつながり、学校復帰にとどまらず誰かに相談したい気持ち・友だちを信じる気持ち・自分を出して友だちと関わる気持ちを引き出した。今後こうした教員の関わりが、多くの不登校経験者の学校復帰を支え、自己理解を進め、生きる力を育むことと確信する。

5 課題

本研究では人間関係をめぐる問題から不登校に至った生徒を対象にし、不登校の多様さに対応していない。多様性のある不登校の取組みを充実させるためには、更に様々な生徒の声に耳を傾け、分析・考察することが必要であると考えられる。

おわりに

今回の聞き取りでは生徒の変化が語られたが、話している時間の中でも、緊張した表情で言葉短く語る姿から、笑顔で自分の内面を語る姿になっていった。

自分の体験を語り、「学校に行けなくなった子の気持ち分かるようになった」「一番辛かったことは親を泣かせてしまった事。だから他の人にも不登校はしてほしい」と他の生徒に思いをさせ、現在学校を休ん

でいる生徒に対する教員の支援として「様子の変化に気づいたら先生から声を掛けてほしい」「熱心に相談に乗ってほしい」と語る姿は聞く者の胸を熱くする。

不登校の子どもに対しての時に、自身の気持ちが届いていないのではないかと不安になったり、焦燥感や無力感を抱いたりすることもあるだろう。しかし、学校・教員の緩やかだが止むことのない地道な関わりが、生徒の安心感へとつながり、不登校の児童・生徒を徐々に学校復帰・登校継続へと導く。

聞き取り調査にあたり、協力いただいた生徒の皆さんと先生方には多大なご理解とご協力、ご支援を賜った。惜しめない協力をくださった各学校・関係者・生徒の皆様に改めて心よりお礼申し上げます。各人の語り不登校児童・生徒の心理状況を理解し、不登校に対する取組みを充実させる一助となることを願って止まない。

引用文献

- 文部科学省 2011 「平成22年度 児童生徒の問題行動等 生徒指導上の諸問題に関する調査について」 p. 46
小林正幸 2002 『先生のための不登校の予防と再登校 援助—コーピング・スキルで耐性と社会性を育てる—』ほんの森出版 p. 195

参考文献

- 現代教育研究会 2001 「不登校に関する実態調査—平成5年度不登校生徒追跡調査報告書—」
文部科学省 2003 「今後の不登校への対応の在り方について（報告）」
文部科学省 2011 「平成22年度 児童生徒の問題行動等 生徒指導上の諸問題に関する調査」について
神奈川県教育委員会 2009 「神奈川県不登校対策検討委員会 報告書」
神奈川県教育委員会 2011 「平成22年度 神奈川県児童・生徒の問題行動等調査 調査結果概要〔速報値〕」「同 調査結果一覧〔速報値〕」
神奈川県立総合教育センター 2010 「平成21年度 県立高等学校定時制課程に在籍する生徒に対する長期欠席等に関する調査報告書」
石川瞭子 2007 『不登校を解決する条件—中・高生を中心に—』青弓社
伊藤美奈子 2009 『不登校—その心もようと支援の実際—』金子書房
小澤美代子 2003 『上手な登校刺激の与え方—先生や家庭の適切な登校刺激が不登校の回復を早めます!—』ほんの森出版 p. 89
小林正幸・大熊雅士 2009 『不登校にしない先生・登校を支援できる先生』明治図書
森田洋司 2003 『不登校—その後 不登校経験者が語る心理と行動の軌跡—』教育開発研究所